

「平和な社会の尊さと戦争の怖さ」

李 慈誠

僕が広島市平和記念式典児童派遣事業に参加して、強く感じたことが二つあります。

一つ目は、原爆の怖さです。一九四五年八月六日、戦争中ではあったけれど家族や学校の友達などと普段とあまり変わらない夏を過ごしていた八時十五分、米軍が落とした原子爆弾が爆発しました。ものすごい爆音と強烈な熱線、そして放射線は一瞬にして広島の人

々の命を奪いました。気づいたら建物は跡形もなく消え、さっきまで話していた人が一瞬で溶けてなくなってしまうことへの恐怖はどれほどだったのでしょうか。平和記念資料館は、その恐怖を物語ってくれているようで、僕の想像を超える恐ろしい現実を目の当たりにしました。展示しているものは残酷で衝動的なものばかりで、もしてさるなら助けあげたいという気持ちと悲しさしか感じませんでした。中でも特に心に残ったのは、「原爆

の絵」です。僕が見た絵は、え絵を描いた方の被爆体験をもとに作られた絵でした。「b二丸が見え、思わず頭を上げた瞬間、全身に熱線を浴び、完全に意識を失った」とか絵の説明が書かれていました。僕はこの絵を見て、自分と同じぐらいの時にこんな苦しみを受けたのか、と胸を締め付けられた気分でした。二つ目は、平和な社会の尊さです。今、世界には一二五二〇発もの核爆弾があります。そして、広島・長崎に落とされた原爆より遙かに優れた爆弾もあるそうです。僕が実際に家族をなくして、たった一人であの場にいたと考えると、本当の戦争の怖さが分かった。たうな気がしました。そして、僕がこうして友達と、家族と一緒に幸せな日々を過ごせているのは決して当たり前ではなく、今を平和と思えるのは、平和を守るために命を惜しまなかった人々がいたおかげだと思います。この戦争のない生活を続けるには、戦争がいかに悲惨な結果をもたらすかを絶対忘れてはいけ

ないと思います。

そして、核による被害をもう出さないために、私達は日本もしてしまつた過ちを振り返るべきです。原爆投下前の時点で大きな被害を出していた日本は、アメリカがポツダム宣言をしたのにもかかわらず、それを無視し、結果原爆へと進んでいきました。もし、アメリカが原爆投下をしなかつたとしても原爆以上の被害があつたと思います。僕は、原爆を落としたほうが良かったか、それとも原爆を落とさないで被害が大きかつたほうが良かったかは選べませんが、もしできたのなら、素直にポツダム宣言を受け入れ、核を使わず平和へと解決して、いてほしかったです。

広島では、原爆の怖さだけでなく、このような他の大切なことも教えてもらいました。他にも大切なことがいっぱいあると思うので、それをこれからも考えていきたいと思っています。派遣団の一員として貴重な体験をありがとうございました。